

Title	プルーストとboule de neigeの花束(スワン夫人の「白の長調交響曲」)
Author(s)	阪村, 圭英子
Citation	Gallia. 41 P.47-P.54
Issue Date	2002-03-09
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/5376
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

プルーストと *boule de neige* の花束 (スワン夫人の「白の長調交響曲」)

阪村圭英子

はじめに

『失われた時を求めて』のなかには、スワン夫人が演出する色彩の調和的探求に関するいくつかの場面がある。ジェラルール・ジュネットが述べているように¹⁾、過度で執拗なほど華麗なオデットの生活スタイルは、フランス世紀末の装飾美学の一典型となっているが、スワン夫人に対する主人公の夢に合致するすべての要素をそなえている。その一例が「テマリカンボク」*boule de neige*²⁾の花束と、雪のような毛皮とで構成された夫人の純白のサロンである。語り手はさまざまなイメージを駆使し、多様な文学・芸術への重ね合わせを通して、白い花の美しさへの陶醉を表現することに努めている。その描写は視覚・聴覚・触覚など諸感覚の照応を基調としている。ここでは、プルーストがスワン夫人の色彩センスを示す花として選択した *boule de neige* についての考察をこころみる。

I. スワン夫人の *boule de neige* の花束とラファエル前派

語り手は、初恋の相手ジルベルト・スワンと会わなくなっても、その母スワン夫人のサロンに訪問を繰り返していた。彼がスワン家で見いだす楽しみの一つが、スワン夫人によって *boule de neige* の白い丸い花々で飾られたサロンの魅力 (RTP, I, 623-624) である。

サロンの中で〈氷聖人〉のころや聖週間³⁾に、寒の戻りで震える夫人の手と肩を覆う白貂⁴⁾の輝く毛皮は、いつまでも溶けることのない雪の塊に喩えられている。この寒気にもかかわらず、早くも咲き出す *boule de neige* の花は印象的な存在

プルーストのテキストは以下を使用、*A la recherche du temps perdu*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., 1987-1989. (省略記号 RTP) *Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1971. (CSB) *Jean Santeuil*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1971. (JS) 各引用後の括弧内に出典の省略記号とページ数を記入する。本文中の引用は既訳を参考にしたうえでの拙訳である。

1) Gérard Genette, *Figures III*, Seuil, 1972, p.50.

2) フランス語で *boule de neige*[雪球]という名の植物は、オオデマリの仲間のテマリカンボクにあたる。しかし本論では、フランス語の意味が重要なため *boule de neige* を用いる。プルーストは1920年のスーズ大公妃あての書簡で、彼女のサロンがこの花の場面のモデルと示唆している。 *Correspondance de Marcel Proust (Cor.)*, Plon, 1970-93. t. XIX, p.586. また1922年にはストロース夫人のサロンの花がそれだと記している。(同, t. XXI, pp. 208-211.)

3) 〈氷聖人〉の祝日とは5月11、12、13日であり、聖週間とは復活祭前の一週間で、3月中旬から4月のことが多い。この頃よく気温が下がることがある。

4) プルーストはこれを「黒貂」*zibeline*と書き、初版ではそう印刷された。しかし、前後の記述

だ。語り手を魅了し、陶酔させるその花々は、ラファエル前派の画家たちが描く植物を想起させる。それはまた受胎告知の天使のように真っ白な服をまとい、文字どおり雪の玉のように丸くなって、レモンのような香りを漂わせている。コンブレ近郊のタンソンヴィルの館でしばしば時を過ごしていたスワン夫人は、冬のように肌寒い初春でもすでに植物が開花していることをよく承知している。夫人が「白の長調交響曲」として部屋を飾った白く咲き乱れる *boule de neige* は、主人公の青年に「聖金曜日の不思議」の奇跡とタンソンヴィルの小さな坂道を思い出させ、田園への郷愁をかきたてる。

まずラファエル前派に注目しよう。プルーストはラスキンの評論を通じて、イギリスのこの新しい芸術グループについて知り、啓発された。それはジョン・エヴァレット・ミレーやウィリアム・ホールマン・ハント、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティらが、アカデミックな絵画に反抗して、ラフェエロ以前に似せた様式、つまり自然に忠実でありながらも、深い象徴性に富んだ世界を創作しようとした運動であった。自然描写に関心をもっていたプルーストは、植物学的な精密さで草木が丹念に描かれている彼らの作品に惹かれたのである。スワン夫人の花をプルーストは、「ラファエル前派の絵にある直線状の灌木のように、むきだしで高い茎のいただきに」咲いた白い球形の花々として語る。

実際、ラファエル前派の画家たちは白い花を好む傾向があった。なかでも、プルーストが偏愛するサンザシの花が、後期ラファエル前派の代表的画家バーン＝ジョーンズによって描かれている。ブルターニュ伝説による『円卓物語』から題材が取られた『欺かれるマーリン』(1874)である。プルーストはバーン＝ジョーンズの作品を好み、その名前が草稿に何度か現れている⁵⁾。問題の絵は、プロセリアンドの森で、妖精ヴィヴィアーヌが魔術師マーリンを誘惑する場面が描かれていて、白い花々をびっしりとつけたサンザシの木が背景となっている。プルーストは1907年8月のレーナルド・アーン宛の書簡⁶⁾で、初期習作のモデルであったド・レズケ夫人を、バーン＝ジョーンズの描いた、夢見る目をしたヴィヴィアーヌにたとえている。『ソドムとゴモラⅡ』のなかでは、語り手がバルベックで交際を望むあこがれの少女がヴィヴィアーヌに比較されている(同、Ⅲ、234)。プルーストのエロチスムの根底に、白い花の世界で男を破滅させる「ファム・ファタル」のイメージがあると言えるだろう。

バーン＝ジョーンズの絵がスワン夫人の *boule de neige* とまったく無縁であるとは思えない理由がある。それは、この挿話の後半部でこの花がサンザシと同等比較されているからだ。語り手は夫人が飾った花束を見つめるうちにジルベルトとの出会いに結びつくタンソンヴィルの坂道を思い出す。「スワン夫人のサロンをタ

と矛盾するので、何者かによって「白貂」*hermine* と訂正され、プルーストもそれを認めたようで1920年の版では「白貂」と記されている。プレイヤッド版は訂正せずに「黒貂」のままであるが、ここでは他の諸版に従う。RTP, I, p.623の注1と上記の書簡(p.586)を参照。

5) RTP, II, p. 1043, 1275, 1278, III, 239, 1476.

6) *Cor.*, t. VII, p. 239.

ンソンヴィルの小さな坂道と同じように純潔で、葉のしげみはまったくないが、同じようにあどけなく花咲き、同じように本物の匂いで満ちあふれたものになっているからだ。」その坂道で生け垣を覆い尽くすように咲き乱れ、強い芳香を発して語り手を恍惚とさせたのはほかならぬ白いサンザシの木々であった。(同、I、136)

一方、「白い受胎告知の天使」という表現に注目すると、ラファエル前派の詩人にして画家であるロセッティ⁷⁾の作品で、その題名が受胎告知を承諾するマリアの言葉「Ecce Ancilla Domini (私はあなたのしもべなり)」が連想される。この絵のなかで天使もマリアも白い服を着ている。ところで『失われた時を求めて』において、処女マリアのこの場面を舞台上演するのは、サン＝ルーの愛人であり、元娼婦のユダヤ人女優ラシエルだ (RTP, II、142)。ラシエルは貴族を含む聴衆の前で、白い衣装をまとい、白百合を手にしこの言葉を語るのだ。白い服も百合もマリアの純潔をあらわすものである以上、娼婦上がりのラシエルが前衛劇のなかで使用したことは、聴衆のあざけりを買っただけであった。

たしかにバーン＝ジョーンズとロセッティの絵に描かれたサンザシおよび百合と *boule de neige* との共通項は、白い色だけであって、花の形も樹形も似通ってはいない。しかし、プルーストがラファエル前派の白い花に関心を示したとき、それは清純、無垢のイメージのゆえではなく、誘惑する女性像としてであったことは、示唆に富んでいると言わなければならない。白が純真さに直結しないことは、バルベックでのサンザシが、薔薇色の林檎の花との比較において、「快感をそそるには、しわくちやの白でじゅうぶん」(同、III、182)と告げることにも見いだせる。リナ・ヴィエールは、プルーストの花についての論考において、サンザシをはじめとする白い花が官能性をもっていることを指摘した⁸⁾。プルーストの白い花は、必ずしも伝統的な無垢の概念にとどまらないのである。

II. *boule de neige* と音楽の比喩：「白の長調交響曲」と「聖金曜日の不思議」

スワン夫人のマフのそばに、*boule de neige* があるだけで語り手は田園への郷愁をかきたてられる。しかし語り手の言うところによれば、スワン夫人にとって、これらの花の役割は、作家ベルゴットのすすめるままに、室内装飾や衣装と調和のとれた「白の長調交響曲」を奏でることにはほかならなかった。それでも、彼女のサロンで咲く白い花々は、「聖金曜日の不思議」にしたがって、毎年春とともに蘇る自然の奇跡を目にすることができることを語り手に思い出させる。それは少年時代の失われた楽園コンブレへの思いにつながる。

この短い一節に、音楽に関するふたつの言葉「白の長調交響曲」、およびワーグナーの『パルジファル』第三幕の冒頭の場面「聖金曜日の不思議」が登場する。ところでスワン夫人はエレガントに装う技巧にたけていても、室内装飾に関して

7) プルーストは1903年11月、「美術骨董時報」に、この画家とそのモデルであったエリザベス・シダルについての論考 (CBS, 470-474) を掲載していた。

8) Rina Viers, «Fleurs blanches et sacrilège : à propos d'une lettre inédite de Marcel Proust» *Europe*, 1971, n° 5-6, pp. 950-964.

はまったくの素人であった。スワン氏と知り会う以前も以後も、趣味をもつ知人たちが、彼女に助言を与えねばならなかったのだ。boule de neige を白のサロンに飾る効果を教えてくれたのが作家ベルゴットである以上、「白の長調交響曲」と文学作品との関連をまず考慮しなければならない。注釈者たちは、この場面の典拠として、ゴーチエの詩集『七宝と螺鈿』（1849）の「白の長調交響曲」と題された詩を指摘している⁹⁾。たしかにゴーチエの詩においては、「花々の白い霧の重さにたゆむ五月のサンザシ」のような白をテーマとする語彙が多用され、このサロンの花の描写のイメージにごく類似している¹⁰⁾。他にも、ダヌンツィオが『官能児』（1889）でローマを「白の長調交響曲」と描写していることも知られている。

ところで、花束と交響曲を直接結びつけた作家はバルザックである。『谷間の百合』の主人公フェリックスが作る花束には、ベートーヴェンの交響曲のように激しく人を感動させる力があつたとされる¹¹⁾。この花束を受け取るのは、「ブランシュ（白い女性）」と呼ばれるモルソフ夫人だ。フェリックスは夫人に一目ぼれし、母を慕う子供のように飛びついて以来、夫人に純愛を捧げ続ける。

バルザックの花束は、コンブレーで、少年の語り手を自宅に招待するルグランダンの言葉のなかに引用されている（同、I、124）。プルーストは『谷間の百合』からはただ一種、ベンケイソウしか借用していないが、バルザックの花づくしに倣って多くの花の名をここであげている。その中に「復活」の日の花、ヒナギク¹²⁾と並べられたboule de neigeがある。「復活祭のみぞれ雨の最後に残った雪球がまだとけないうちに、あなたの大叔母さんの小道で匂い始めたboule de neige」と表現されている。まだ雪の降る復活の日が強調されるこのboule de neigeは、後のスワン夫人の「白の長調交響曲」の場面への伏線と考えられよう。

ところが、その白い花々はジルベルトが姿を現わすタンソンヴィルではなく、大叔母の庭に咲く。ここにはまったく別の意味が含まれているのではないだろうか。母方の親族である大叔母の庭で、語り手にとりもっとも大切な女性とは、「就寝のドラマ」であれほどその接吻を望んだ彼の母である。ルグランダンが、boule de neigeの直後に言及するソロモンの百合は、バルザックの白い百合、若者が激しく恋する母性の権化のようなモルソフ夫人ことブランシュを連想させるとは言えないだろうか。すなわち「白の長調交響曲」の花には、母親的なイメージをそなえた女性への愛がこめられていると考えることが許されるのではなからうか。

絵画の分野においては、プルーストが敬愛していた画家ホイッスラーが、1862年から「白のシンフォニー」と題された3点の連作を描いている。「白の交響曲」

9) RTP, I, p. 624 の注1 を参照。

10) *Poésies complètes de Théophile Gautier*, t. IV, A. G. Nizet, 1970. pp.22-24. 白鳥の女、氷河、雪球の胸、白の毛皮、肩の白さ、百合、雪など。

11) Honoré de Balzac, *Le Lys dans la Vallée*, Garnier, p. 119.

12) 復活の日の花 (la fleur de la Résurrection)は復活祭がPâquesであることから、同格で並べられたヒナギク la pâquerette をさすと考えられる。Littréによると、その語源はPâquesではなくpâtis (放牧用の荒野) だというのが、*Trésor de la langue française* はヒナギクをPâquesの花としている。

の流行ともいえるこの文化現象には、その背景がある。1856年に化学染料が発明されて鮮やかな色が服飾に用いられるようになったが、それでも女性たちは好んで白色の衣装を身につけた。この事実は、ティソやマネの絵画に表現されている¹³⁾。世紀末の保養地では男性も白いスーツをしばしば着用していたが、『失われた時を求めて』の語り手は海辺で男性の衣装に氾濫した白を、「けばけばしくてありふれた白」(同、Ⅱ、112)と批判している。一方スワン夫人が着用する白は、最上級の毛皮である白貂の色であり、彼女を温かく包む毛並みの柔らかな手触りまでもが想像される。その触感、白色、花の香りが強調されていることは、この段落の描写に諸感覚のシンフォニーを奏でる意図をうかがわせる。

ではワーグナーの『パルジファル』第3幕の「聖金曜日の不思議」への言及はどのような意味を持っているのか。パルジファルの物語においては、聖金曜日に自然の草花が春を迎えて再び咲き香る不思議に主人公が驚く場面をさしている。プルーストはこの場面と音楽に特別の関心をもち、草稿でも書簡においてもその曲名が繰り返し現われている。聖金曜日に旅から戻ったパルジファルに、洗礼がほどこされ、誘惑者であった魔女クンドリが香油を彼の足にかけ、マグダラのマリアことマドレーヌのように長い髪で彼の足を拭う。パルジファルは美しい花々の光景を目にして、受難の日になぜ花は悲嘆にくれずに咲くのかとたずねる。そして彼は、神の犠牲に感謝した人間が、この日ばかりは慈愛の心をもって草花を踏みつけないように歩くので、はかない草木がそれに感謝を捧げているのだという教えをうける。プルーストが語る「より賢明ならば」毎年立ち会える自然の奇跡とは、この植物の復活をさすと注釈者たちは一致して述べている。だがそれだけなのだろうか。ここでは、『失われた時を求めて』以外のプルーストのテキストからこの奇跡を再検討してみよう。

Ⅲ. ジャン・サントウイユの *boule de neige*

『ジャン・サントウイユ』のある断章において、*boule de neige* の名が繰り返し登場する。ジャンが休暇で滞在しているエトウイユの祖父の庭園に大きな花房をつけた *boule de neige* が咲いているのだ。この場面で何よりも特徴的なのは、この花がジャンの母親に結びついていることである。

庭園の扉を押すとすぐに、茂みの枝と枝の間に、ジャンに庭師がその呼び名を教えてくれた丸い「雪球」の花々がうずくまっているのが見えた。それらはつま取られても手のなかで溶けもせず、食堂のいくつもの花瓶に活けてあるのと同じように真っ白で丸いままであった。ジャンは、ついにこれからは、大地にしっかりと居座って燃えるように熱い同じ太陽の光のなかで、母が永遠に若いままで、彼が永遠に自由に楽しくしていただける、もう何も変わらな

13) ジョン・ハーヴェイ、太田良子訳、『黒服』、研究社、1997、pp. 315-362。(第6章「黒服の男と白いドレスの女と」)を参照。

い日々がやって来たのだと漠然と考えた。(JS, 325)

雪の球と呼ばれるのに溶けない花は、永遠の不変を意味する。ジャンが待ち望んでいた奇跡とは、愛する母との不変の関係、永遠に若い母のそばで暮らし、自分も成人することなく、永遠に子供のまま義務からも責任からも解放された日の到来だったのだ。プルーストは『ジャン・サントゥイユ』のなかに、主人公の少年が母の接吻をねだって発作を起こす「就寝のドラマ」の原型を描いていた。作家の心性を反映して、ジャンは母をこよなく愛し、いつも母がそばにいることを切望しつづける。

この断章の少し先でも、boule de neige は、さきほどと同じ表現で「庭園の茂みのなかでうずくまっているのをジャンを見つけ、つま取られても手のなかで溶けてしまうことなく、サロンの花瓶のなかでも同じく白く丸いままのあれらの boule de neige のように (同、326)」と描かれている。それは、川に浮かんだボートに少女と乗っていたある中学生の知った甘美な歓びに連結されている。この歓びとは、思春期の少年が初めて知った官能的快樂に他ならない。「花がつみ取られる」という表現は、快樂を得ることをさすと考えられるが、この花はつま取られたあとも変わらず、白く丸いままだ。花びらは雪のように冷たくはなく、指を優しく愛撫してくれる。結局のところ boule de neige が象徴するのは、「接吻」を与え、つねに変わることなく、息子をかぎりなく愛し、包み込み、決して離れずそばにいてくれる母であるように思える。しかし母親は、息子が少女たちに惹かれるのを禁じる。彼女はジャンが病弱であるという理由でマリという少女（のちのジルベルト）との交際を禁じたのであった。

この断章の最後には、休暇が終わりパリに戻るジャンがサンザシと boule de neige を持ち帰ろうとするエピソードが登場する。これらの花々は、マリアの月（5月）には教会の祭壇にも飾られている。ジャンたちがパリに帰る日に、叔父（らしい人物）はこれらの花を沢山切り持って来てくれた。けれども、母は黙ってその花束を受け取ったものの、叔父が立ち去るやいなや、邪魔になるからと捨ててしまう。ジャンは、母の意地悪な仕打ちに涙にくれるのであった（同、326）。

父の代わりとも言える叔父が与える春の花とは、母の立場からすれば、母と息子の間を妨害しかねない「純白の乙女たち」なのである。彼女はそれをパリまで連れ帰るなど論外であると息子の眼前で捨て去る¹⁴⁾。母の独占欲と嫉妬があきらかに見て取れよう。母親の権力行使による花との惜別は、『失われた時を求めて』では、コンブレーでのサンザシとの別れに姿を変えて現われる。けれども美しい花束を捨てる母親の乱暴な行為は、そこでは念入りに整えた息子の身なりが乱れたことを嘆くだけの間接的表現となり、テキストの下に隠されてしまう。

このように、『ジャン・サントゥイユ』では、boule de neige は屋外でも、屋内でもその名に反して陽光にも溶けることのない強靱な花である。それは永遠の快

14) カイエ 29 (I, 860) とカイエ 14 (I, 868) の似たようなエピソードでは、叔父の与えるコンブレーの花はサンザシになり、boule de de neige は消滅している。

楽、すなわち母と息子の濃密な愛を象徴する花だったと言えるかもしれない。ジャンにとっての奇跡とは、永遠に若い母のそばで幸福感にひたりながら暮らすことをさすのではないだろうか。

では、スワン夫人とは語り手にとってはどのような人物であろうか。語り手が最初に夫人を見たのは、タンソンヴィルに突然現れたジルベルトの母親としての白いドレスの女性であった。このとき彼女は娘に対して威圧的にふるまい、娘と少年の出会いを断ちきる。つまり支配する母のイメージそのものだ。やがて少年がジルベルトとの恋を通して、スワン家訪問を重ねるうちに、スワン夫人は憧れの大人の女性へと変貌してゆく。彼女は、まだ社交界の礼儀に疎い少年に対し、まるで母親のように、英国貴族への名刺の置き方など細かい忠告を与えるようになる。

ところで、スワン夫人と語り手の母の間には、なにか接点があるのだろうか。スワン氏がコンブレーの家を訪れたとき、語り手の母は彼を喜ばせようと、ジルベルトのことを話題にし、次のように語る。「あなたのお気持ちができるのはママンであるものだけですわ。お嬢さまのお母さまもきっと私と同じお考えですよ。」この言葉を聞いたのは、かたときも母から離れまいとしていた主人公の少年のみである（同、I、24）。そのとき使用された〈母〉ではなく〈ママン〉という優しい響きは少年の注意を引き、彼の心のなかで二人の母親像がたやすく重なったことであろう。

さらに語り手は、コンブレーの親族がスワン夫人とは交際しないことを不満に思っており、一度だけ母とスワン夫人を直接比較している。スワン夫人が化粧するのは、夫のためではなく愛人らしい男性のためであるという噂を聞いたとき、自分の母がスワン夫人のように化粧をしないことを残念に思うのである（RTP、I、98）。彼は、虚飾をきらう母親よりも、人工美を愛し、異性を意識する女性、ある種の娼婦性をそなえた母親像に惹かれたのであった。

それゆえ、boule de neigeにかこまれたスワン夫人の背後には、いつまでも白く丸いまま子供を愛する母親の理想像がひそんでいると考えられよう。ゴーチエの詩に描かれた「雪の球のような胸」をした母親である。なめらかな毛皮はスワン夫人の肩を覆い、マフからは彼女の手元がのぞく。触れると快感に結び付く毛皮へのこの言及は、愛撫し、愛撫されたい性的感覚を喚起するものではなからうか。異性の注目をあびながらも、ほかならぬ息子の自分しか愛さない母。不滅の花による早春の演出に、語り手のコンブレーへの郷愁、母との幸福な日々への郷愁がかきたてられる。

ここで「聖金曜日の不思議」について再度考えてみよう。パルジファルは、クンドリを通して、母の最後の接吻を授けられる愚かな息子だ。彼が、自然の復活する奇跡の日を迎えるには、より賢明に母の言うことに従い、「花咲く乙女たち」の誘惑を退け、純な息子のままでいることが必要であった。ところで小説には、語り手が自らをパルジファルになぞらえる場面が存在する。ゲルマント家での晩

餐において、招待客に紹介される語り手は、花咲く乙女たちのただ中に導かれたパルジファルに喩えられている。花咲く乙女たちとは、深くあけた胸元をミモザなどで飾りたてた社交界の婦人たちのことだ。語り手は、彼女たちの誘惑するような挨拶について、母ならば反感を覚えるだろうとの感想を述べている(同、II、716)。

ルグランタンは不滅の花 *boule de neige* を、復活の日の花と同列に扱い、復活祭のころに咲く花であるとみなしている。この白い花をめぐって〈復活〉のテーマが周到に配列されているのは明らかだ。復活祭が語り手にとって特別な意味をもっていたことを思い出そう。『失われた時を求めて』のなかでキリストのように復活するのは、とりわけお茶に浸したマドレーヌを口にしたときに蘇るのは、コンブレーの日々である。母性と愛情をこめられた『ジャン・サントウイユ』の *boule de neige* は、スワン夫人のサロンを飾ることになるが、ここでコンブレーへの郷愁をさそうのはむしろ自然なことであった。

『ジャン・サントウイユ』のなかには、雪の名がついたもうひとつ別の花が登場する。「雪を割る」という意味の *perce-neige* (スノードロップ/マツユキソウ) で、22才になったジャンが母と食事をする場面に出てくる。父が不在の日、母と水入らずで過ごしたジャンは幸福感に満ちあふれ、母との散歩の帰りにこの花の束を持ち帰る。帰宅後ジャンは、用意させておいた昼食を母と差し向かいで味わうとき、家の主人の席に座る。このとき太陽が微笑みながら、ふたりの間に飾られたコップに活けられた *perce-neige* を照らし出している。(JS, 857)。ふくよかな *boule de neige* が母の姿を表わすならば、この *perce-neige* は、それを突き刺し、父に取って代わる篡奪者ジャンの勝利を象徴するかのようだ。あまりにも近親相姦的感情を反映したかのようなこのエピソードは、『失われた時を求めて』から排除されている。

結 論

スワン夫人が *boule de neige* でつくりあげた「白の長調交響曲」、それはたんに世紀末的な装飾インテリアであるばかりではない。そこには「復活」をめぐるさまざまな象徴性が配置されているのだ。バルザックの花束、ラファエル前派、ワーグナーの「聖金曜日の不思議」など、過剰とも言える多面的な芸術への言及によって、春の自然の復活を、つまり、雪が残っていても花々が咲く、永遠に若い母と息子の蜜月の日々をさしているのだ。プルーストが、『ジャン・サントウイユ』で固執した不滅の花のイメージをスワン夫人の *boule de neige* で繰り返すのは、『失われた時を求めて』のなかでも、母への不死の愛と追憶を復活させるためだったと考えることができよう。

(大阪大学博士課程在学中)